

ソーシャルワーク

● ソーシャルワークとは

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義（2014年）は、「ソーシャルワークとは、専門職であり、実践基盤の学問である」「ソーシャルワークは、社会正義、人権、集団的責任、多様性尊重の諸原理をその中核に位置づけ、個人の生活課題に取り組み、ウェルビーイングを高めるように働きかける」ことを明らかにした。日本ソーシャルワーク協会は、このグローバル定義をソーシャルワーク実践の基盤と認識し、「人々がつながりを実感できる社会への変革と社会的包摂の実現をめざす」ことを倫理綱領に明文化している。

ソーシャルワークの構成要素には「クライアント」「ニーズ」「ソーシャルワーカー」「社会資源」があり、ソーシャルワーカーは、地域社会で生活するクライアントの多様な生活ニーズを充足させるために、クライアントと社会資源の関係に働きかける。社会資源には「専門機関（福祉施設や病院）や専門職というフォーマルな要素」と「家族や友人等というインフォーマルな要素」があり、社会資源は地域社会に多種多様に存在している。クライアントの生活支援に向けて社会資源を活用するところに、ソーシャルワーク実践の独自性がある。

ソーシャルワークの体系化へ導いたリッチモンド（Richmond, M. E.）の定義（1922年）の骨格に「①人と環境、②個別的に、③意識的調整、④パーソナリティの発達」がある¹⁾。人と環境の関係性に介入・調整する実践とその視点は、今日のソーシャルワークの原点になっている。ソーシャルワーカーは、クライアント個人へ直接的に働きかけるとともに、社会資源や環境を活用しながら間接的にも働きかける。つまり、図1のように、「人」に対して、「環境」に対して、さらに「人と環境の関係性」に対して、介入・調整し、クライアントが抱える生活問題に向きあい、クライアントの主体性を尊重して解決につなげる。

● ソーシャルワークの援助

ソーシャルワークの援助の原理とは、「ソーシャルワーカーは、クライアントを人間の尊厳を有するかけがえのない存在として認識し、多様性・個別性が豊かな生活状況を汲みとり、クライアントのとの信頼関係を構築しながら、ストレングス視点に立ってクライアントの潜在的問題解決能力（コンピテンス）を引き出し、援助の実践へ展開する」ことにある。

バイスティック（Biestek, F. P.）は、援助関係の概念はいかなる人間も価値と尊厳をもつことを前提として、クライアントに対して、「①個人として捉える、②感情の表出を大切にす、③援助者は自分の感情を自覚する、④受け止める、⑤一方的に非難しない、⑥自己決定を尊重する、⑦秘密を保持する」という個別援助の原則を挙げている²⁾。

岡村重夫は、社会福祉的援助の原理として、①社会性の原理、②全体性の原理、③主体性の原理、④現実性の原理を挙げ、社会関係の主体的側面という生活当事者の視点に立つことの重要性を唱える³⁾。クライアントがもつ生活史を把握し、「生活の背景」と「人生の歩み」という生活の全体から、クライアントを一人の人間として理解していくのである。

● ソーシャルワークのモデルの変遷

ソーシャルワークは、転換期を迎えている。これまでは戦後の福祉六法体制をそのまま受け継ぎ、タテ割り・法的枠組みに基づく「課題別」「対象者別」の対応を続けてきた。しかし、現代社会では、「①社会・家族・個人、生活や価値観、生活課題も多様化している。②ソーシャルワーカーが向きあう課題には多面的要因があり、深刻化している。③戦後に構築された社会福祉基礎構造では対応・順応できない状況や事態が散見される」。こうした時代や社会の変化から、ソーシャルワークのモデルや実践方法の見直しも要求され、これからの個人の生活支援には、多職種連携による総合的・包括的な相談援助が必要になっている。

ソーシャルワークは、個人の生活場面である地域社会を基盤として援助実践を展開する。そのためには、「①クライアントの生活の側から援助を組み立てる。②住民・当事者主体を尊重して実践する」ことが求められる。こうしたソーシャルワークの基本姿勢は、すでにリッチモンドが「共通基盤」として提言したが、その後のソーシャルワークは各時代や社会を象徴する科学や理論に揺らされながら、多様なモデルやアプローチが提唱されてきた。

ソーシャルワークの実践モデルは、精神医学の影響を受けた医学モデルから、人と環境の関係から個人の生活に焦点化する生活モデルへ、さらにクライアントの強さや長所に焦点をあてるストレングスモデルへ変遷を遂げてきた(図2)。ジェネラリスト・ソーシャルワークは、人と環境の相互作用に焦点化する生活モデルを中核に据え、各領域に貫通するソーシャルワークの共通基盤を明らかにし、クライアントに適する各モデルの強みを生かしながら、地域における当事者主体の生活支援につなげていく。このように現代社会においては、個人や社会の多様性に向きあい、個人の生活支援を実践していくために、多様なモデルやアプローチは統合化されてきたが、ソーシャルワークの本質を見直す機会にもなっている。

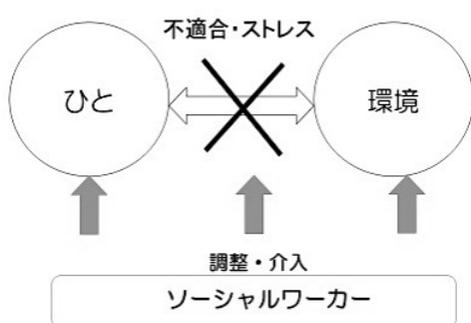


図1 ソーシャルワーカーのとらえ方

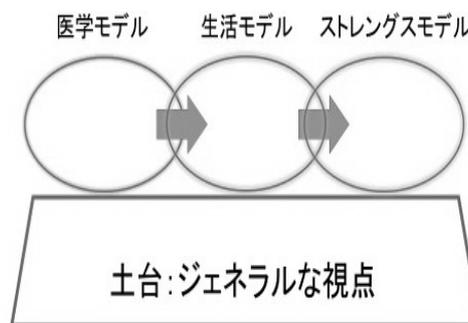


図2 実践モデルの相互関係 <ミクロレベルにおいて>

参考・引用文献

- 1) Richmond, M. E.: What Is Social Case Work? Russell Sage Foundation, 1922 小松源助訳: ソーシャル・ケース・ワークとは何か. 中央法規出版, 1991
- 2) Biestek, F. P.: The Casework Relationship, Loyola University Press, 1957 尾崎 新, 福田俊子, 原田和幸訳: ケースワークの原則. 誠信書房, 1996
- 3) 岡村重夫: 社会福祉原論. 全国社会福祉協議会, 1983

(梓川 一)